学術の風景 Vol.37

思いがけない読者との出会い

永田和宏

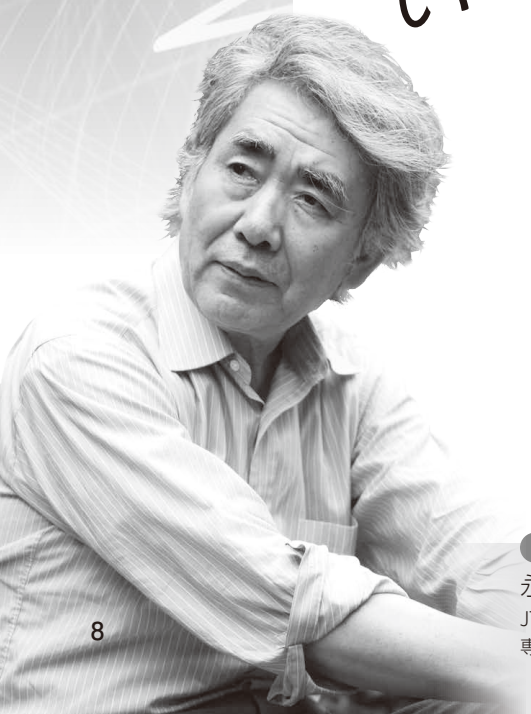
私はここでは一応細胞生物学者として文章を書いているつもりなので、あまり文学に類することは書かないつもりできたのだが、今回は私のもう一つの職、歌人としての立場から、本を出版するということの意味、またそれにまつわる驚きや喜びについて、最近の経験を書いてみようと思う。

サイエンスの分野でも、いくつかの本を出してきた。専門書は当然のこととして、もう少し広い読者を想定し、サイエンスのおもしろさを知っていただきたいとして出した本まで、これまでに出版した点数は割合多いほうかもしれない。

しかしまあ当然のことではあるが、歌人として出版した本はそれよりははるかに多いと思う。15冊の歌集の他に、評論集や入門書まで、どれくらいになっているのだろう。サイエンス絡みの単行本ではあまりないことだが、思いがけない読者との出会いといったものに遭遇することがあり、そんな時、ああこの本を出しておいてよかったとしみじみ感じ入ることがある。

最近大いに驚いたのは、私の第一歌集『メビウスの地平』（茱萸叢書）に関するものであった。私は今年、ありがたいことに毎日芸術賞という賞をいただくことになった。毎日新聞社が出している賞で、美術、音楽、演劇、文学などの諸分野から選出されるようである。今回は、歌集『置行堀（おいてけぼり）』が対象となった。

受賞はうれしいことであったが、選考委員



プロフィール
永田和宏（ながた　かずひろ）
JT生命誌研究館館長、京都大学名誉教授、京都産業大学名誉教授
専門：細胞生物学

の一人、松浦寿輝さんの選考理由を読んでほんとうに驚いてしまった。松浦さんは、対象となった歌集『置行堀』の歌の深い理解のうえに、この歌集の意味や、私のこれまでの足跡について過分な評価のあと、次のように文を結んでいたのである。

「みずみずしい青春を謳った彼の第一歌集『メビウスの地平』を刊行直後に胸をときめかせて読んだ者として、わたしはこの円熟の境地に至るまでの彼の長い道程にいま改めて思いを致し、深い感慨を禁じえない。」

私の第一歌集をリアルタイムに読んでくれていた。これにはほんとうにびっくりした。

なぜって、私の『メビウスの地平』は茱萸書房という、ほんとうに小さな出版社からの出版であり、たった500冊しか出ていなかったからである。この本はその後、文庫本や選集にも入って、それなりに多くの読者に読まれていると思うが、私が28歳で出版したわずか500冊のうちの一冊を、ほぼリアルタイムで21歳の松浦寿輝が読んでいた。その後、東大教授、詩人、小説家として活躍することになる当時まだ無名の青年が、その文学活動のもっとも初期に、「胸をときめかせて」読んでくれていたということを知ったのは大きな驚きであり、正直に言えば、賞をいただいたこと以上に私にはうれしいことであった。

受賞の挨拶でもこのことを述べたが、確率の著しく低いその偶然には、会場からも驚きの声が漏れていた。

私の妻河野裕子は、与謝野晶子以来と形容されることも多く、長く歌壇のトップランナーの一人として走ってきた歌人であったが、2010年に乳がんで亡くなった。彼女の闘病の十年の現場、また彼女と出会って結婚するまでの過剰に激しかった恋の顛末は、それぞれ『歌に私は泣くだらう』（新潮社）、『あの胸が岬のように遠かった』（新潮社）として出版されている。

河野の死後、息子の永田淳が『評伝・河野裕子　たつぷりと真水を抱きて』（白水社）なる河野裕子伝を出版した。河野の幼年期からその死までを、日記や種々の資料を駆使して、客観的な記述に息子の視点を微妙に絡ませつつ書いた労作である。

それを読まれた精神医学の泰斗、『時間と自己』（中公新書）の著者でもある木村敏先生から、息子に電話がかかってきたのだという。

河野は晩年、乳がんとの闘いのなかで、精神的に不安定になり、一時、家の中が修羅場の様相を呈した時期があった。その間のことは『歌に私は泣くだらう』に詳しく記したのだったが、打つ手がなくなった私は、京大医学研究科でご一緒させていただいた木村敏先生にお願いし、河野は二週間に一度、京都の深泥池にある博愛会病院で、木村先生のカウンセリングを受けるようになった。そのなかで、精神的不安定からくる攻撃性は

徐々に回復に向かって行った。

木村先生には最後までお付き合いいただくことになった。河野の死の二日前には自宅までお見舞いにも来ていただき、河野裕子が家族以外で最後にお目にかかったのが木村先生ということになる。

その木村先生からの電話。息子の淳の河野裕子伝には、河野が高校生の時に、友だち関係の苦しみから、自律神経の失調かなにかで学校で倒れ、滋賀の水口病院で医師の診断を受けたことが記されている。そこで受けた診断名が「間脳症（脱力発作）」。

木村先生は、「高校生の河野先生を診断したのは私に間違いありません」とおっしゃる。「間脳症」という病名はドイツ留学から帰ってきたばかりの精神科医木村敏が考え出した病名で、河野さんを診たのは私以外にはあり得ませんとも。

何ということだろう。最後まで精神面の主治医となっていただいた木村先生と河野裕子は、40数年前に滋賀県の片田舎で出会っていたのだった。お互いにそんなことには露ほども思い及ばないままに、40年の時を隔てて、今度は女流歌人のトップランナーと、精神医学の泰斗として、数年間をともに過していたことになる。

我々三人はすぐに集まり、木村先生の提案で、水口の病院からカルテを取り寄せましょうとなったのだったが、さすがに50年前のカルテは手に入らなかった。

一冊の本が開いてくれた思わぬ展開であった。永田淳の伝記が出なければ、そして、それを木村先生が読まなければ、永遠に誰も知ることのなかった事実であった。著作などを通じて、深い尊敬の念を抱いていた木村敏。己の若き日にまさにその先生に診察を受けていたことを、河野裕子は遂に知らぬままに亡くなってしまったのだった。

知ったからといって、何の利益があるわけでもない。しかし、一冊の本が開いてくれた、そんな奇跡のような不思議な過去との照応に、私などは深い感動を覚えるのである。

多くの本が読み捨てられていく風潮のなかで、苦労して本を出すことに徒労感に似た思いを抱くことも少なくない。しかし一方で、その一冊がなければ、たとえ関係者であっても知り得なかったような秘密が明らかになることもあるのだ。事実の発見だけが出版の意味ではないが、一冊の本に隠されている可能性は、一律には推し量ることのできないものであることをまざまざと実感させてくれたのであった。